

五才児の記録 ②



磯部景子
堀合文子
津守真

幼稚園生活をすでに一年又は二年経過している五才児の五月下旬から六月のはじめまでの状況を記録をとおしてみたい。そして先生が子どもの状況をみつめながら計画をたてて、子どもたちといっしょに実現していく過程をみたい。

五月二十日 水曜日

起重機・つり竿・電車をつくる。

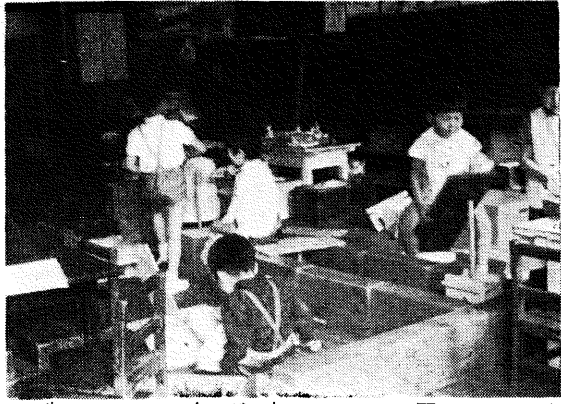
保育室では本を読んでいる子どもがふたりと組み板で船をつくっている子どもがふたりいるだけで、他の子どもたちは皆、庭にでてあそんでいる。先生は子どもの机に向かって、糸まきを模様をかいたり、厚紙の箱に模様をかいったりしながら、子どもたちがあそんでいるようすをみている。クラスのほとんど全員の女兒はたいこ橋に集まって、たいこ橋にのぼったり足をかけてきかさまにぶらさがったりして、皆大声で何かはなしている。砂場ではEたちが深い穴をほり水をためている。Kたちは庭中を駆けまわっている。警官ごっこをしているらしい。Mがいつの間にか仲間からはずれて、たいこ橋であそんでいる女兒のところに行く。Mは最近になってようやく友だちとあそべるようになったがまだむらがあつて、友だちといっしょにあそぶ時間がみじかい。㊦たちが庭にごぎを敷いて輪ゴムをつなぎはじめる。(この時つないだゴムはその後のあそびの道具になり、秋のオリンピックあそびの高とび競技の時など大いに活用された)

どのグループをみても先生が入る余地は全くなさそうである。

くみ板で舟をつくる人数が六人になる。十時すぎから、保育室にいる子どもの人数がぼつぼつふえる。

先生は箱に穴をあけてひもをとおし、糸まきを箱にむすびつける。四月以来、子どもたちは毎日のように大きいグループになって

舟をつくる



あそんでいる。外のあそびも十分活発になってきたし、そろそろ何かはじめたいという意図があつて、先生は今日の作業をしている。

Eが水のをみに「教室に入ってくる。先生が糸まきをつけた箱に色をぬっているのをみて、

E「先生、何ついているの。」

先生「糸まきがいっぱいあるでしょう。」

E「ほんとうにうごくの。」とEは動かしてみる。

くみ板で舟をつくっていたYは、Eと先生がはなしているのをきいて

Y「ぼく、いいことを考えた。起重機をつくらう。」

K「ぼくもつくらうかな。」と舟からでてくる。

Tが石けんの空箱を四つ持ってくる。セロテープでつなぎはじめる。そして、何につかうためか紙を小さくきりはじめる。

T「きっているうちに小さくなっちゃった。こんどは大きくとっておこう。」と少し大きくきりはじめる。

TのとなりではHがすわっている。Yが向こうの机からくる。

H「何をつくっているの。」

Y「起重機」

T「ぼく、電車」

H「ぼくもつくらう。」と先生のところに行く。

Yは7ミリ四方60センチの長さのひごの先にストローを三角に折って結びつけて、三角の中にひもとおして、ひもの先にせんたくばさみをむすびつける。

Y「先生、できた。」

先生「起重機って、おもしろいことを考えたわね。手でもっているのは大変だから箱につけて、ささえるところをつくったら。」

Yは先生といっしょに箱をさがす。

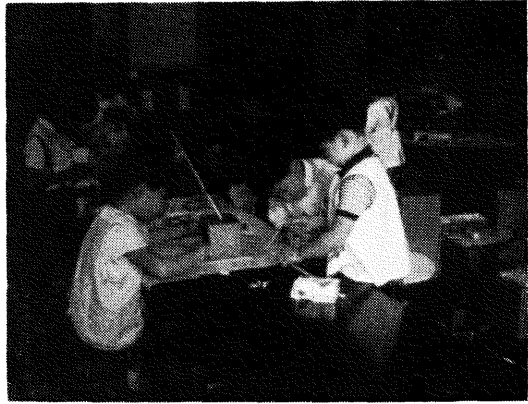
先生はばねや、洗たくばさみやストローやひもなどを準備するのにいそがしくなる。

H「ぼくね、つり竿にしたいな。」

先生「つり竿の先はどうなっているかしら。」

H「こうしてね、動くのつくりたいな。」

起重機をつくる



先生「あー、動くの

ね。」

とHといっしょに材料
を考える。

H「何か、びたつ
と、くつつくもの
ないかな。」

先生「そう、じしゃく
みたいだね。」

Hと先生ははなしなが
ら棚をさがす。

Tはさきほどから三
十分くらい、ひとりご
とをいいながら石けん
の箱に穴をあけて、もめん糸をとおそうとしている。

T「太いのじゃだめだ。とおらないよ。」

T「そうだ。穴を大きくすればいい。」

十一時二十分になりおべんとうの準備がはじまる。電車をつくつ
ていたTはつくりかけの電車を持って先生のところに行く。

T「先生、あしたおべんとうある。」

先生「ええ、ありますよ。」

T「あーよかった。それじゃ全部できあがるかもしれない。」
と、さも安心したようにつくりかけの電車を棚の上におく。

翌日、Hは箱つみ木で池をつくり、魚つりをはじめ。Tは外で
夢中であそんでいる。昨日の電車は戸棚においたままである。また
いつかつくるのであろう。

五月二十三日 土曜日

いろいろな店をつくる。探偵事務所をつくる。

今日もほとんどの子どもが庭にでている。パットでホールをころ
がし合っているもの、砂場であそぶもの、車にのつてはなしている
もの、宇宙線とんだをしているもの、たいこばし、すべり台など。

先生は子どもの机に向って案内状をかいている。先生のそばで
が空箱をかきねている。

S「大変、大変、ねずみがいたよ。」

と保育室にかけこんで、すぐまた走って外に行く。保育室にいた
三、四人の子どももみんなSにつづいて走っていく。幼稚園の子
どもが、ねずみを見に行つて他の場所はしんとなる。しばらくして
H「こんなに大きなねずみが死んでいた。」

と興奮してはなしながら帰ってくる。

㊦を中心に㊧、㊨が空箱で小さな陳列棚をつくりはじめ。画用紙にクレヨンで小さな洋服やお菓子をかき、切りぬく。空箱の中にしきりをつけたり棚をつけたりして陳列棚をつくり、きりぬいた品物をはりつける。四才の時におもちゃやをして、その後時々先生に、「またおみせやさんをお願いしますよ。」とはなしていた。先生も子どもたちの考えを実現したいと思っていた。

Hたちは保育室に帰ってきて、ままごとコーナーと箱つみ木の舟とを結んで宇宙探偵事務所をはじめ。

このあそびは二か所に分れてお互いに通信し合うのだが、多くの場合は二か所別々のところに舟とか飛行場をつくりその後、通信機（くみ板の棒のはしにつけるボタンの形をしたゴムのキャップ）をそてなえて、探偵事務所になるのである。そして、たいていは舟とか飛行場をつくるのに大部分のエネルギーをつかっていた。時にはみんながねずみになってねずみ探偵事務所になることもあるし、時には、くみ板で自動車をつくり、一方では自動車修理場ができて、お互いに通信し合うこともあった。

㊩、㊪は紙で洋服をつくり「ようふくや」と看板をかく。女児を中心に店づくりが盛になる。先生も子どもといっしょに箱の陳列に洋服のかざりつけをする。そして

先生「お友だちにもてつだってもらったら。」

と㊭、㊮にはなしかける。

㊯は得意になって

㊰「デパート、もうじきできあがるの。」という。

㊱は洋服をかざりおわり

㊲「洋服屋さんができあがっているの、だからつだって。」と大きい声でいって歩く。

㊳「わたしたちもつくない。」

といっしょに絵をいていた㊴にいう。

㊵と㊶が箱を持つてくる。

先生「あなたたち、何屋さん」

㊷「わたしたち、花屋さん」

㊸と㊹が庭から帰ってくる。

先生「今ね、いろいろなお店ができていよ。あなたたちもお手伝いして下さいね。」ときそう。

こうしてだんだん店づくりの人数が多くなり、男児も店づくりをはじめ。

魚屋、傘屋、靴屋などができる。

H「はるとこなくなっちゃった。」

先生「じゃ、もういっけんつくりましょうよ。」という。

先生はできあがった陳列棚を積み重ねてみる。まだ小さなデパートだが子どもたちは「デパートができた。」といって大よろこびをする。

いろいろなみせ



みせを二けんつなげる



デパート



五月二十五日 火曜日

自動車リレーをする

朝から誕生会のおかしを入れるかごをつくる。でき上った人から外にでてあそびはじめ。こうしてはじまったあそびのひとつの自動車リレーの経過をおってみる。

N はかごとつくにつくりあげて外にでている。自動車に乗って
みたり、自動車からおりて、砂場の方をみたり、つり輪の方をみ
りしている。H がでてくる。

H 「N くん、この自動車に乗ってもいい。」

N 「いいよ。」

H は自動車に乗る。

N 「そうだ。自動車リレーをしようよ。」

A がでてくる。

A 「入れて。」

N 「もうひとりよんでおいでよ。」

H 「もう一台借りようよ。」

(自動車は子どもひとり乗れる大ききで木でできている。ハンドル、車が四輪ついでいて、クラスに一台ずつ備えてある)

N 「はじめの競争は乗らないの。」

H はとなりの組の自動車を借りてくる。

H 「おそいな。」とAが走って行った方をみている。

A がTといっしょに走ってくる。

A 「Tくんだぞ。つれてきたぞ。」

T 「君たち、これ何のくみ。」

とにこにこしている。

N 「はじめの競争はのらないの。」

四人は二台の車を並べ、ふたりずつ組になり自動車を押して走り始める。

S が走ってきて

S 「タイム」

とストップをかける。四人は車を押して出発点に帰ってくる。向こうからKとRが自動車を押して走ってくる。

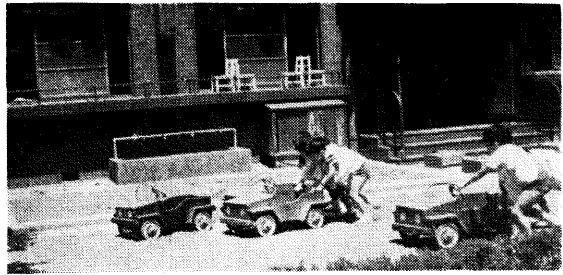
K 「入れて。」

A 「いいよ。」

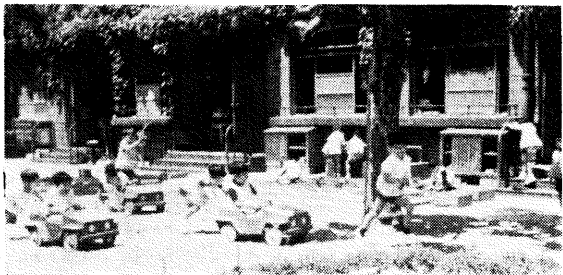
三組並んでSの合図のもとに走りだす。

ふたりで車をおすので方向が定まらず走っているうちに三台が別々

ふたりでいっしょにおす



のるひととおすひとにわかれてきょうそうする



の方向にいきおおいよく走ってしまう。Aたちは藤棚のところまで折り返えして出発点に帰ってくる。

A 「おおい」

N 「おおい」と他の二台に声をかける。

A 「エンジンをかけよう。」

といって「ブー、ブー」といいながらとび上っている。

A 「おおい、今度はのる競争だよ。」

N 「はやくいけよ。」

N 「はやくおせよ。」

A 「乗るのは小さい人が乗るのね。」といってさっと自動車にのる。

他の二組も出発点にもどりSの合図で走りだす。こんどは人がのっているのなかなか進まない。そしてやっばり三台が別々の方向に走る。Tの自動車は砂場のふちによこづけになる。Tは何とかして動かそうといっしょうけんめい押す。先生が保育室からでてきて、先生「しっかり、しっかり」

と手をたたいて子どもたちを応援する。砂場に横づけになったTの自動車をみて

先生「あら、あの自動車、バンクしたらしい。」

とひとりごとをいう。Tがやっと藤棚でおりかえしてくる。

先生はTをみて

先生「さいごまで走ってえらかったわね。」という。

S 「Tくんびりたいちょうだ。」

T 「こんどは、ひとりで押すのがいいよ。」

K 「そうしよう。」

皆、それぞれにどちらが先に押すかを話し合う。

S 「ようい、どん。」

のこった子どもたちは「がんばれ、がんばれ」と自分の組を応援する。

T 「Hくん、うまいぞ、うまいぞ。」

帰ってくると選手交替で走りだす。

自動車が四台になる



R 「がんばれ、がんばれ」

応援していたTが

T 「ねっ、自動車四つにしようか。」

S 「ようし」と闘志をもちやす。

T 「いいぞ、いいぞ」

S は自動車を借りてくる。そして、自動車を押して出発点に戻ってきたみんなにいう。

S 「これも入れよう。」

S 「ふたりずつだよ。」

とバートナーの組みかえをする。

R 「じゃM君とぼくだ。」

などとそれぞれ相手をきめる。やはりSの合図のもとに走り始める。

もう応援するのもあきてきたのか「向こうで待っていいよ。」と折り返し点の方に走って行く。

N 「おおい、こんどは向こうで待ってるぞ」

と車を押している子どもたちにいう。

A 「向うで待っていていいよ。」

H 「みんな、よくきけ、向こうでまってるよ。」とかけて行く。交替する場所がかわり、人数もふえてきたのでまたくみかえがはじまる。

R 「おい、ぼくの押すのはどれた。」

T 「ぼくとAくん同じ組でしょう。」

A 「N君とY君、同じ組」

H 「ぼくはだれとやるの。」

S 「ね、みんな、ここまででてよ。」

とスタートラインをひく、そしてみんな並ぶ。

S 「ちよつとまでよ。ぶつかっちゃうよ。」

と自動車を少しずつはなす。

S 「よい、どん」

車を押さない残りの子どもたちもいっしょに走りだす。こうして一時間位あそぶ。

存分にあそんだからか、人数が多くなりすぎてうごきがとれなくなつたからか、まもなく「やめた。」といつて皆保育室に入る。

Tは保育室に探偵事務所をみつつけ。

T 「おい、探偵事務所だつて。」

といいながら信号を打ちはじめる。

五月二十七日 水曜日

誕生会 ばらのとげと蜂

◎Tがばらのとげをあつめて手のひらにそつとつけている。しばらく集めていたが◎が鼻の上にとげをのせて、「蜂よ。」といつて走りだす。◎・Tも蜂になつてとんでいく。子どもたちは先生をみつ

せんせいが花になる



ーメンの音楽隊の幻燈をみる。

五月二十九日 金曜日

マジックで絵をかく。園長室にめずらしいものを見に行く。

ほとんどの子どもが外であそんでいる。雨が降りはじめ、みんな保育室にかけこむ。先生はマジックと大版の画用紙とB5版の画用紙を机の上にだす。次々と子どもたちは「えをかく。」といつてくる。先生から画用紙をうけとってかきはじめる。先生は「大きい紙には大きくかいて下さいね。」という。

けて「蜂よ。」といつて先生のところに走って行く。先生は子どもたちをみて、花になり「ぶん、ぶん、ぶん、蜂がとぶ」とうたいながら両手を高くあげて花になる。子どもたちは先生のまわりでおどりだす。

遊戯室で誕生日のお祝いがある。

五月生れの人が壇場にあがりみんなからお祝いをうける。

そのあと、動物のなき声のあつてつこをする。犬の動物園の遠足とブレ



かき終わった子どもが

次々と先生のところに

絵を持っていく。Aが

あひると女の子もが

歩いている絵を持って

くる。先生はAの絵を

みながら

先生「あら、おはなし

ができそうね。」

A「タやけよ、これ

白鳥なの。」と先

生にはなしはじめ

る。

なしができそうね。」とAがはなすのをきいている。しばらく絵をみながらAとはなししている。

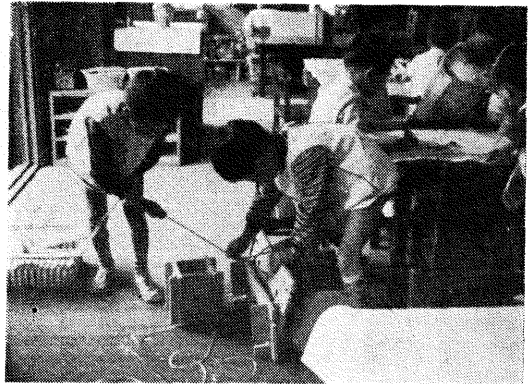
先生「そう。お山のむこうにお日さまがしずんでいくの。」

絵をかきおわり組み板で自動車を組みたててあそぶ子どもが多くなる。組み板がたりなくなり、KとMがとり合う。

先生「みんなが仲よく使ってね。ふたりに使うとか三人で使うとか、よくおはなししてね。」

H「ぼく、いいこと考えたよ。板二つでできる方法。」

いいことを思いつく



先生「それもいいわね。」

KとMはふたりでつく

ることにする。自動車

ができあがりMがのつ

て、Kがおしている。

他の子どもたちもそれ

ぞれ自動車をつくる。

二台つないでいる子ど

もたちもいる。保育室

の中なので自動車を運

転していると机やいす

にすぐにぶつかってしま

まう。机やいすの間をやっとぐりぬけたか

と思うと車はずれる。いきおいあまつつないでいたビニールのつなげられる。絵をかいている子どもは少数になり、保育室中ほとんど自動車ごっこになる。自動車の修理場ができたり、おもちゃのパケツとぼうそうきんを持ってきて洗車場ができたり、そこにごちそうをはこんできてままごとあそびも自動車ごっこといっしょになる。

H「自動車が故障しました。」と修理場に通信する。

R「洗ってね。もうちょっとはやく。」



A 「この自動車は中を洗って下さい。」

Ⓚ 「私たちはぞうきんで

ごしごしこすり、バケツで水をかけるまねをする。」

Ⓚ 「発車、おうらい。」

R 「おいつなげちゃおう。」

A 「それがいい。」

H 「ふたりのって、ぼくひっぱる人」

とHはいっしょうけんめいひっぱるが動かない。

H 「やっぱり、ひとりになって下さい。後の車はタイヤをはこぶ車にして下さい。」

A 「おい、後からもおしてやるからな。」

部屋中大きわきをしているうちにおひるになる。先生が保育室の入口のところまで、「いいのみせてあげるからきてごらんさい。」と子どもたちをさそって園長室に行く。園長室の大きい机に外国の

めずらしいものをみる



人形、食器、お金、洋服、首かざり、糸をひっぱると頭と尻尾が動く小鳥などがかざってある。

Ⓚ 「わー、きれい。」

Ⓚ 「あ、おさいふもある。」

H 「ぼくのうちにもこういうのあるよ。」

Ⓚ 「わー、首かざり。」と夢中になってあれこれとみる。

先生 「こういうの、

考えてつくるといいわね。」という。

五月三十日 土曜日

巻紙にクレヨンで高速道路をかく。

模造紙に絵の具で絵をかく。

もうずいぶん前から机や、こしかけを使って、あるいは友だち同志で持ち合ってブロック積み木を空中に高く走らせて高速道路をつく

っていた。絵の中にも時々高速道路がみられた。今日は先生が計画して巻紙に高速道路を書くことを試みる。巻紙を用意して、クレヨンでかくことにする。

男児四人が長い巻紙に高速道路をかいて、いろいろな種類の自動車をたくさんかいている。

先生「さあ、もっと長くしましょう。今度は自転車に乗った人なんかもいいわね。自転車はどこを走るかしら。」といいながら既にかいたところをまるめて新たに白い部分をひろげる。

K「また線路をかかなくちゃ。」

S「つなげよう。」と既にかいてある高速道路につづけてかく。

K「ピッチャー交替」といしながらSに続けて自分の前に道路をかく。

A「ぼく、もう、リレーやめたよ。」と外から入ってくる。Kたちが高速道路をかいているのをみる。

H「ピッチャー交替」とKの道路のつづきをかく。

その間、先生はポスターカラーをといて模造紙をだしてくる。机を二脚並べて、女兒がふたりビニールのエプロンをかけて絵の具でかきはじめ。

H「ぼくも絵の具したいよ。」

K「くたびれちゃった。」

Kたちは少しあきてきて、絵の具の方に気をとられている。

先生「ああ、くたびれたらどなたか他の人にかわればいいわ。さっ

き書きたいっていった人があったからその方を呼んでかわればいいわ。」

K「ねえ、次の人を呼んでこようよ。」

S「あつちよつと待って、これだけかくから。」

先生「さつきYちゃんたちが書きたいっていったけれど。」

K、S、Hはいっしょになって庭にいるYを呼びに行く。Y、T、

M、Aが高速道路を書きに入ってくる。

先生「ほら、Yちゃん、Bちゃんたちがここまでこんなに長く高速

道路を書いて下さったのよ。長くなったでしょう。」

Yたちはそれぞれクレヨンを持ってきて書きはじめ。

しばらくしてYたちと交替してIがひとりでかいている。

K「Iちゃん、ひとりでかいているの。」とおどろいたようにいう。

I「うん、今はね。」

K「先生、もう一度高速道路かく。」

S、H、もいっしょに書きはじめ。

H「おもしろいね。こうやってかくの。」

K「うん」

S「ブー、ブー」といいながら自動車をかく。

S「せんせい、バスもかくよ。」

H「えんそく、えんそくなの。」

K「ほら、バトカー」

先生「あら、バトカーも走っているのね。」

こうして交替で次々に書いていく。

N 「わあ、先生、紙がなくなっちゃったよ。」

T 「先生、できた。」

先生 「え、もう。あーら、ほんとうにいいのができたのね。あ、バ

スもこんなにたくさん人がのっているのね。どれどれひろげて

みましょう。」N、T、Kといっしょにひろげてみる。

T 「すごいな。」

K 「わー、こんなに長い。」と子どもたちはおどいてみている。

保育室の別の場所で、絵の具で絵をかいていた子どもや、昨日のつづきのマジックで絵をかいていた子どもも高速道路の絵を見にくる。

六月一日 月曜日

黒板いっばいに大きい鉄人かく。

先生は子どもたちといっしょにおみせやの台をつくっている。先

生から少しはなれた机では絵の具で絵をかいている。(土曜日のつづき)外では砂場あそびがさかんで一日中砂場にいた子どももいる。

山の上では人形ごっこ、リレーをしていた。Kたち四人が黒板いっばいに横にとんでいる大きい鉄人をかいている。

先生 「みんなでかいていいわね。いいこと次々に考えだすのね。」

M 「先生、ぼくより大きいよ。」と黒板の下にねる。

先生 「ほんとね。Kちゃんより大きいわね。消さないでとっておき

ましようね。」

以前鉄人を書くのがはやり、男児は好んで鉄人ばかりかいていたことがあった。いつか先生が「鉄人ばかりじゃなくて、鉄人じゃないものも書くといいわね。」といったが、子どもたちはその後鉄人はあまり書かなくなつたが、同時に絵をかく意欲を失った。書きたいものを存分にかくことの重要さが感じられた。黒板の鉄人は一週間以上も消さないでとっておかれた。

六月三日 水曜日

デパートがだんだん大きくなる。

先週の土曜日からつづいていた絵の具で絵をかくのは、今日でみんなかきおわる。T、Y、Hは厚紙で飛行機をつくりはじめる。

㊦たちがデパートをつくっている、先生はつくりかけの陳列を持つてくる。

先生 「㊦ちゃん、傘屋さんはいつでできるの。だれかにてつだっている。ただくといいわ。」

㊧は靴屋のつくりかけを持ってきてつくりはじめる。㊨は

先生 「だれか、手のあいている方、八百屋さんが足りないんだけど。」という。おひる頃には沢山の陳列棚ができる。

先生 「何階のビルにしましょう。」と陳列棚を重ねてみる。